

2021. 7. 20 (火)

## 「敵」と出会うということ

鈴木 謙 介

「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」(マタイによる福音書 5章 43-48節)

### 見えない敵を求める

私の敵はどこにいるの？

君の敵はそれです

君の敵はあれです

君の敵は間違いなくこれです

ぼくら皆の敵はあなたの敵でもあるのです

これは、茨木のり子の「敵について」とい  
う詩の冒頭の一節です。この詩は「私」と  
「ぼくら」の対話のような形式で書かれてい  
ます。一方の「私」は、自分の「敵」と呼べ  
る相手を探し求めている。先ほど紹介したよ  
うな「間違いなくこれが敵だ」という存在を  
示してほしいというんですね。「私」は、「ぼ  
くら皆の敵はあなたの敵でもあるのです」と

言われて「ああその答えのさわやかさ 明快  
さ」と言います。

ところが「私」と対話している「ぼくら」  
は、それに対してこんなことを言います。

敵は昔のように鎧かぶとで一騎

おどり出てくるものじゃない

現代では計算尺や高等数学やデータを

駆使して算出されるものなのです

この言葉には、はっとさせられるものがあ  
りますね。いま、コロナ禍の僕たちを取り巻  
いているのはまさにこうした「見えない敵」。  
それは日々の数値、新規感染者数、重症病床  
使用率といった形でしか判別できない、目  
に見えないものです。

社会学部で勉強していると、このような数

字やデータに対するリテラシーを高めることを求められると思います。主観ではなく、客観的なデータとして社会を把握できるようにならなければいけない。ここで言われている「計算尺や高等数学やデータを駆使して算出される」敵は、いま、コロナとの戦いの最前線で、日々科学者の人たちが向き合っているものということになります。

ですが、そんな声に対して「私」は答えます。

でもなんだかその敵は  
私をふるいたたせない  
組み付いたらまたただのオトリだったり  
して  
味方だったりして……そんな心配が

確かに、データや数字で言われても、それがいいことなのか悪いことなのか、よく分からなくて、見る気をなくしてしまうということもありそうです。数字の読み方を間違えるくらいなら、もう見ないことにしておもうという人もいます。

一方でメディアを見ていると、目に見える敵の話もたびたび出てきますね。政府・内閣、与党、IOC 関係者。去年だったら「夜の街」、パチンコ、ライブハウス、居酒屋など。昨日今日の話で言えばオリンピックの音楽を手がけるはずだったミュージシャン。こうした対象は、見えない敵よりもわかりやすく、僕たちを怒りに奮い立たせる。場合によってはいまの「大学」や「先生」に対して、そういう怒りを抱えている人もいます。なんでやねん、と。

この詩は、そういう単純な怒りを抑え、冷静になってデータとしての敵と向き合うべきだ、そういう風に言いたいのでしょうか。詩

の後半では、「私」が、熱烈な思いで「敵」を求めている様が描かれます。

なまけもの  
なまけもの  
なまけもの  
君は生涯敵に会えない  
君は生涯生きることがない

いいえ私は探しているの 私の敵を

敵は探すものじゃない  
ひしひしとぼくらを取りかこんでいるもの

いいえ私は待っているの 私の敵を

敵は待つものじゃない  
日々にぼくらを侵すもの

いいえ邂逅の瞬間がある！  
私の爪も歯も耳も手足も髪も逆だって  
敵！ 叫ぶことのできる  
私の敵！ と叫ぶことのできる  
ひとつの出会いがきつと ある

つまり、「敵」との「出会い」を求めているというんですね。これは一体どういうことなのでしょう。

怒りを向ける先を見失わないこと

いま、目に見える敵に憤っている人がもっとも目につくのは、ネットの世界だと思えます。ソーシャルメディアやニュースサイトでは政府を批判する声、IOC に対する怒りを表明する人、あるいはマスメディアが偏った

情報を伝えていると文句をつける人など、怨嗟や罵詈雑言が溢れている。敵と出会うということは、要するにこういう風にもっと怒れと言いたいんでしょうか。

僕は、少し違うことを考えました。

インターネットのコメントにせよ、あるいは、YouTuber が世の中に物申す動画にせよ、それはあくまで「意見の表明」や、一方通行の罵倒でしかないんですね。つまり、コミュニケーションが存在していない。憤りの対象に向けて怒っているだけなんです。広く何かを伝達するという意味ではコミュニケーションかもしれないけれど、「出会い」とこの詩で言われているような関係性は存在しない。

では、どうやって敵と出会えばいいんでしょう。そもそも、なぜ敵と「出会う」必要があるんでしょう。

この詩が書かれたのは、1960年の安保闘争の頃だったといえます。60年安保というのは、日米安保条約をめぐる世の中を二分する対立があって、政府に対する反発の声が抗議運動として盛り上がり、結果として岸信介政権が退陣することになった出来事ですね。

この頃の風潮を見ると、少しいまに通じるものがあります。岸は、高まる安保反対の声に対して「野球場も映画館も満員だ」と言っていて、相手にするつもりがない。デモ隊が首相官邸を取り囲んでも、一切出てこないで、安保条約が自然承認されるのを待つ。つまり、国民の声に対して無視を決め込んで「敵対」しなかったんですね。

こうなると、反対している国民は、相手に届かないところで一方的に反対の声を上げているだけということになります。そして、な

ず術もなく、既定路線でものごとが決まってしまうことになる。

茨木のり子という詩人は、そのような、自分の預かり知らぬところで、ほかならぬ自分の人生が翻弄されてしまうことに、強い怒りを表明した人でもありました。教科書にも載った「わたしが一番きれいだったとき」という詩があります。

わたしが一番きれいだったとき  
街々はがらがら崩れていって  
とんでもないところから  
青空なんかが見えたりした

わたしが一番きれいだったとき  
まわりの人達がたくさん死んだ  
工場で 海で 名もない島で  
わたしはおしゃれのきっかけを落として  
しまった

わたしが一番きれいだったとき  
だれもやさしい贈り物を捧げてはくれなかった  
男たちは拳手の礼しか知らなくて  
きれいな眼差しだけを残し皆発っていった

わたしが一番きれいだったとき  
わたしの頭はからっぽで  
わたしの心はかたくなで  
手足ばかりが栗色に光った

わたしが一番きれいだったとき  
わたしの国は戦争で負けた  
そんな馬鹿なことってあるものか  
ブラウスの腕をまくり 卑屈な町をのし歩いた

「そんな馬鹿なことってあるものか」という憤りは、戦争に負けたことではなく、「わたしが一番きれいだったとき」を、お国の勝手な都合で無駄にされたことに対する怒りだと思います。同じような怒りを、みなさんも感じているかもしれません。そんな馬鹿なことってあるものか、と。

茨木の考える「敵との出会い」は、そのやり場のない怒りを向ける相手を見失わずにいる、ということだと僕は思います。確かに問題の根っこには、時代や社会の仕組みなどの、個人ではどうしようもない大きな流れがあるのかもしれない。でもそのことに対して、「仕方ない」で我慢して済ませても、「わたしが一番きれいだったとき」は決して戻ってはこない。

### 相手と向き合い、出会うための対話

じゃあ、どのようにして敵と出会えばいいのか。今日は皆さんに、コミュニケーションというものの性質についてお話しておきたいと思います。

たとえば皆さん、こんな会話をすることがありませんか。

「ほんま今日めっちゃ暑い」「ほんとそれマジで無理やねんけど」

一見、普通の会話のように聞こえます。でも、よく考えてみてください。実は会話をしている2人とも、相手に何かを話しかけているのではなくて、自分の「暑い」「無理」という感覚についての独り言を話しているだけです。つまり、相手はこちらの話をまったく聞いていなくても、この会話は成立してしまう。

最新のコミュニケーション理論では、この

ような、お互いに独り言を話しているだけの場面でも「会話」が成り立っているとみなします。むしろ、「無理やねんけど」という人に対して「じゃあ私は何をしたらいいの?」と返したら、相手は困ってしまうはずです。

でも、独り言を言い合うということは、先ほど紹介した60年安保のときの岸政権と安保に反対した国民のような、断絶した、一方的に自分の言いたいことを言い合っているだけの状態によく似ていると思いませんか。つまりそこには、「敵対」も「連帯」も、関係性そのものが存在しない。

自分の人生を決める大事な瞬間に、耳を貸してもらえないことで、こちらの話すことも一方通行になるのは、とても悲しいですね。就活でも、ゼミ選びでも。だからこそ皆さんはこれから、相手をなんとしても振り向かせる、相手に対して強くこちらを意識させる、そういうコミュニケーションについても学ばなくてははいけない。

秋学期に入ると1年生の皆さんは、基礎演習でのグループワークが始まります。ここでは、自分がしたいと思うことと、周りがしたいと思うこと、あるいは、したくないと思うこととの間で対立や葛藤を経験しながら、ひとつのプレゼンを作り上げていくこととなります。そのとき、同じグループの人と互いに独り言を言い合いながら年末まで過ごすのか、それとも、相手と向き合い、出会うための対話をするのか。課題の評価以上に問われているのは、皆さんの「人との出会い方」なんだということを、意識しておいてもらえればと思います。

春学期、お疲れさまでした。これからも皆さんの学びに、対話と出会いがありますように。  
(社会学部准教授)